

【資料紹介】

翻刻・藤山一雄『東邊紀行』(二)

【前号の続き】

密山より虎頭に(十九日)

幾里とも知れぬ平沙のところへ小島の如く浮ぶ岩山

朝日さし地平は銀に光り煙る此の湿原の悲しき廣さ

悲しみに似たる心地す極みなき此の連綿とつゞく不毛地

興凱シシカイの驛にキャベツの籠を、をろす老露人夫婦の品位ある顔。

(そのよそほひ全くの労働者なるも、帝政時代は相当の人なりし
ならん) (三十二ウ)

横顔に小春日うけてのびのびと平沙にねむる完達の山脈やまなみ

此のあたり馬鈴薯すらも出来ぬニ「に」や楊岡の村に畑を見ざ

り

楊岡の東につゞく丘陵に点々散ず六次移民地

湖北の荒野を墾りてけなげにも大陸日本たつるさきもり等

虎林出で、間なし樺立つ丘につゞき、移民村見ゆ。秋日に映え

佐藤睦子

【凡例】

この翻刻は以下の基準にしたがい、作成した。

- 一、自筆稿本『東邊紀行』の体裁にならない、改行すべきところ、紙面の都合により、文字詰めを行なった。
- 一、旧字体、仮名遣い、促音便、地名、誤字、脱字は原文のままとし、人名のあきらかな誤字にはそのまま表記した上で、括弧()に正字を付した。
- 一、本人による訂正は①にて表示した。
- 一、文中のルビは原文のままにしたがって付した。
- 一、不快、差別用語とみなされる不適当な表記も、歴史的資料に準ずる性質上から、原文のままとした。
- 一、句点(。)、読点(、)は原文に従い、一部必要な箇所には、適宜付した。
- 一、文中の歌は一字段下げ、意図的に異なる字体で表示した。
- 一、片仮名表記の助詞等は、平仮名表記「」を付した。
- 一、異体字は、次のように表記した。全「同」、全「経」

て。(東二「に」道岡移民地)

(三十三才)

苦力達の携帯行李 十九日 寶東にて(二ページの挿絵あり)
これだけにて生活出来るなり。バラス籠、鍋、饅頭をむすせいろう、スコップ(挿絵に
ある道具の各名称)
(三十三ウ)

虎頭一帯ハ「は」要塞にて、汽車も窓をシャットし、何も見る能はず。汽車ウスリー河
に沿ひて停車す。即ち虎林県城なり。駅を出で丘にのぼる。丘上には柏、榎、榆、白
樺の疎林と兵隊の病院あり。脚下はウスリー河にして、廿メートル位の断崖なり。
「洋々たるかな水丘の渡ざるは命なり」と孔子ハ「は」言ひしが、二百メートルの対岸は
ロシアにして、余りに平静なる水なり。イマンの町掌中にある。鮭舟点々として河上
にあり。余はしばらく丘上にありて、あたりの風物を見る。

烏蘇里に逼まれる岡の桐林に秋を悲しく

(三十四才)

すゞめ来なける

江畔の柳を映しウスリーの水浸々と夢をかもせる

岡を降り、だら／＼坂の町を江畔に出でし處に妓楼あり。ウスリー氾濫して、水ひた
／＼と街を浸せり。白粉の女数名水を見つゝあり。鮭の二尺余のものを、水竿にてど
やして漁る人あり。之を見つゝあるなり。大陸にてしか見られぬ景色なり。水辺の景
色あまり美しく、附近の朝鮮人の宿屋に一泊を乞ふ。
(三十四ウ)

二階にアンペラを敷ける一室あり。トランクを下ろして向ひあわせの湯にゆく。二十
銭の湯代なり。便所のあまりに汚なきに、膽ひっくり返る心地す。絵をかゝんとして
水を貰にゆく。台所にて汚なき朝鮮女冷麵をつくりつゝあり。その光景と夜具の汚な



さを想像して、二階に上り、そこ〜に荷の仕末して、気づかれぬやうに坂を五町あまり上りて、「ウスリーホテル」に部屋を求めホット一息す。宛然漫画的なり。余もホテルに座して苦笑す。鮮人は儲けそこなへり。
(三十五才)

まぼろしのごとく瞬き向岸の柳を映すイマンの灯影

河岸の家の化粧の人に心引かる旅の心のあさましきかな

丘の上に木をたく煙白々とシベリア風の家群れつどへり

ウスリーの水氾濫し江畔の柳の幹にかゝる鮭船

段々の坂に重なりをのがじぎ軒の舵腹をかざる家々

町かどの廣場を限りベースボール夢中にやれる日本兵隊

十九日 東満の穀倉の一型 (一ページの挿絵あり)

(三十六才)

虎頭江畔 (二ページの挿絵あり)

(三十六ウ・三十七才)

静なる烏蘇里河 [壺翁] 印 (二ページの挿絵あり)

(三十七ウ・三十八才)

虎頭のシベリア的風物 十月廿日 (二ページの挿絵あり)

(三十八ウ・三十九才)

静かなる大和田を思ふ水克のぬれ地①の澤に鶴遊びあり

清和の西は嵩みて耕地展け新に立てし移民村見ゆ

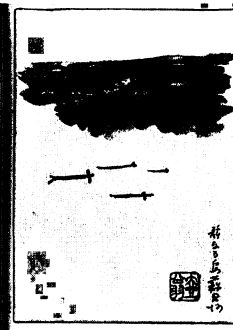
日に三度旅客列車を送り迎ふ古貨車住の香鶴驛長

山際の薄鉛色にほの明けし空を背にしてまばら木並ぶ

銀簪の如く秋日に照り映ゆる畢展富

集を縁取れる白樺

(三十九ウ)



霧湧ける畢展富集に白樺の垣せし如き針葉樹林

十月廿一日 牡丹江市長等の出迎ひうけて全「同」市の発展振を見る。ハルビンがロシア人の町なれば牡丹江は全く日本人の町なり。新驛前の大道は一昨年泥寧に苦しめられし、寂しき野道なりしが、今日は中銀初め大ビル掃比し全く①浦島は吾身の如き感慨なり。協和會にて朝食ハルビン行の列車にて十一時発。(四十オ)

十月廿一日 樺林パルプの町 藤山一雄 印(二ページの挿絵あり) (四十ウ・四十一オ)

東支線沿線の文化は、ロシア聖「経」宮當時に比して、実に一世紀退却せり。横道河子、一面城に有せる吾夢は悉く破れしも、沿道の白樺林の秋日に映ゆる光景は言語に絶せり。

ハルビンに九時半着。大陸科学院分院、博物館長等の出迎をうけ、ホテルモデルンに泊る。此の夜近松仙廣と「妙心寺」を久振に語る。翌朝早くより、博物館を正午まで見る。鑛植物土中物の蒐集の多数なるに驚きしも、その整理出来て居らず。福島館長と昼食して全「同」氏の邸にゆく。(四十一ウ)

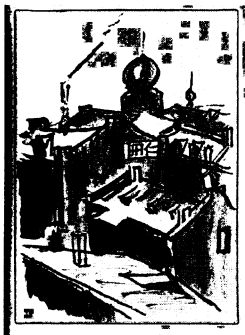
馬家溝斜面一萬坪を占むる半農生活は羨望の至なり。全「同」家製のシャンペン、ワイン等を少しよばれる。後七時頃辞して、丸商に於けるハルビン連中の余の歓迎義太夫会を十一時までさかされる。下手糞連中と四時間も、をとなく聞くは、誠に忍耐を要せり。

博物館陳列品 缸窯鎮製大坐壺 煖酒器(挿絵の資料名を記す)

(四十二オ)

(一ページの挿絵あり)

(四十二ウ)



廿三日 朝モデルンホテルの自室より(前ページの画題)

モリン炭砒の樋野君来訪あり。ヤマトホテルにて密談。午後ハルビン市長と明朝、天理農村視察のスケヂュールを依頼す。市長は余の建国以来の心友なり。午後、矢崎千代治(二)氏のパステル展を見る。夕方弥寿子の来哈を電話せし處成るにのちに、「アジア」を迎に駅にゆく。二時間をくれ十一時着。ニューハルビンホテルに日本間をレザーブし、ゆく。弥寿ハ「は」最初のハルビンなり。(四十三オ)

ハルビン中央寺院 壺翁

壺翁

印(二ページの挿絵あり)

(四十二ウ・四十四オ)

日曜礼拝に中央寺院に参る。白露人満員なり。次にロシア墓地を郊外に訪ふ。これまた澤山の人なり。各々自分の墓地にゆき、そのベンチにこしかけ、亦是サンドウ井ツチ持参にて、半日を墓畔に費す様なり。日本人の如く、唯参りせん香をつけて帰るのに非ず。半日一日を墓に暮らして、故人と交友するなり。此の民族は決して亡びずと思はせらる。人の愛恩を知る民族なればなり。此の旅の最高の収穫なり。スターリンは実にスラブ民族の世紀末的迷の最大表現也。(四十四ウ)

ヤマトホテル、グリルの衝立と椅子のよっかゝりの棒

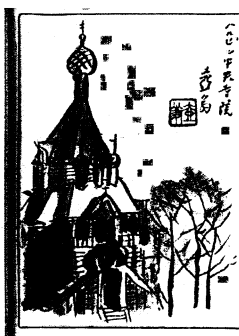
二十三日(二ページの挿絵あり)

(四十五オ)

ウクラインスキー寺院(二ページの挿絵あり)

(四十五ウ・四十六オ)

廿四日 早朝より宿を出で、夫妻氾濫せる松花江を見にゆく。太陽島は水に没しあり。それよりキタイスカヤを上り、新市街の博物館を福島館長の案内にて見物。チューリンを見て文廟に参詣す。熱河のよりも立派なり。午後、福島氏の案内にて傳家甸を見、埠頭を一巡して更にロシア墓地を訪ふ。夜、日満亜麻の常務木村氏に招かれ、夫婦武



蔵野にて夕食す。老妓あり。岩国の三十年前のことをよく知れり。その記憶の正確さに一驚す。木村氏半生のことを語る。(四十六ウ)

全「同」氏の人ど(と)なりには弥寿も感入れり。二十五日「アジア」にて急に弥寿ハ「は」帰京するといふ里心つけるなり。余は阿城の金時代の古址を調査にゆく。㊦阿城はハルビンの東部五〇キロの地点にあり。県城は駅よりニキロ南方の丘上にあり。田舎々せる町に充分の好意をもたせらる。此の夜、丸山大佐長男死去の報あり。一應余も帰京㊦通夜する事に決心し、三時半の列車にのることにする。(四十七オ)

二十三日 夕方(二ページの挿絵あり)

(四十七ウ・四十八オ)

ハルビン文廟図(二ページの挿絵あり)

(四十八ウ・四十九オ)

廿四日 ロシヤ人墓地にて 一雄 弥寿(写真・貼付)

(四十九ウ)

阿城より帰哈して三時間餘あり。三度博物館を訪ひ、アーネルド博士その他二三の白露学者と北満民俗・考古を語り、福島館長とハイラル沙原出土品、成吉思汗城の発掘品等を見、亦地下室の博物標本の未整理品等を見る。惜らくは豫算少く、熱心なる学者等、殊に白露学者待遇の完ならざることなり。一應ホテルに帰りて仕度す。福島氏家づとに、澤山の山芋と露西亜わさびを持参。館の馬車に (五十オ)

て停車場まで見送らんといはる。巨大なるアラビヤ馬にて、輔石の上をカップ〜と快速に走る心地よき限りなり。自動車を用ひず、馬車の用ひるは、如何ニ「に」も福島氏らしく、野趣横益す。山芋の長さは〇、八メートルに及ぶものあり。三時半出発。全「同」車に恩賞局の若い役人あり。尤も愛せるもの等にて、一處に食堂にゆき、四方



山話をなして時の移るを忘る。九時着京。

(五十ウ)

此の度の旅行にて痛感せしことは、北滿日本移民に対する協和會工作の絶するること、及びその子弟の変則なる教育なり。日本移民の繁栄なくして滿洲事変なく、滿洲建国なし。吾等の身命を賭したる建国運動は、実に日本の大陸復帰にあり。その序曲は日本移民の成功にありしなり。協和會工作は、滿洲人よりもむしろ、日本移民に「に」徹底するにあり。その大計はその子弟の教育に存す。

(五十一オ)

中央政府は、産業五ヶ年政○計画、その他の聖「経」濟政治工作に没頭して、その文化工作を顧みる餘裕なし。然ども餘裕なしとて、文化工作を輕視して、滿州人の指導なく日本大陸工作百年の大計なし。誠ニ「に」油断する能はざる時機なり。責任の重大さを痛感す。

二十六日、處用あり。再度ハルビンにゆく。たま〜石井漢一行と全「同」車す。一別以来の四方

(五十一ウ)

山談を語りあい、その夜は漠の舞踊を見、一處にナシヨナルホテルに泊る。

二十七日午前、處用を果し、アジアに三品参謀と全「同」車、移民に対する協和會工作の下相談を車中にてなし、帰京。此の旅を終る。(完)

(五十二オ)

「ハルピン・ナシヨナルホテル」のコースター貼付。

(さとう むつこ)

